

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	雑録
Author(s)	
Citation	龍南, 173: 121-129
Issue date	1919-12-23
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6959
Right	

雜録 目次

部報 (三) △演說部 △弓術部

會報 (三) △山岳會 △第一回龍南
短歌會 △寫真俱樂部
△乘馬會 △花陵會 △
臥龍會演說會 △雜

寮報 (三) △阿蘇登山 △全寮茶話
會 △習學寮第二回演
說會 △消防練習

雜報 (三) △第二十九回創立記念式
△運動會 △高工運動會
選手派遣 △發火演習

△龍南會役員會 △大正
八年度追加豫算案 △
職員消息 △寄贈雜誌
△前號訂正

編輯室より

演說部報

十分間演說會

十月廿四日放課後に十分間演說會を開いた辯士諸君にまつては與へられた十分間は決して充分ではなかつたやうう。しかし皆熱心に論じ辯じてこの短い十分間を有効にそして巧みに用ひられた。

一、新時代の叫び文一甲三 平野宗一郎君
社會改造は新人に依つて企てられ新人に依つてなされなければならないといふことを力説された。美しい言葉とさわやかな辯は聴者をうつ

さりさせる。だがそれだけでは動かすことは出来ない。態度は眞面目であつても内にある心が動かない。彈まぬ力。叫びが燃焼せずしては熱は發せられない。

二、我は斯く信ず 一二丙 土倉 正治君
「力なき善事は罪惡だ。此の後は理想に副ふ力を要する。」その叫びは眞剣であつた。柔い辯の滑りは一つの音樂であつた。

三、去る前に 三二 竹井彌七郎君
自我の擴充を圖れと叫ぶ。

訥々たる辯は君の思想を盛るにふさはしい。一步一步踏み占めて行く考察は君のともすれば

ば訥り勝ちな辯に遺憾なく盛られてゐる。態度に少しあきたらぬ點があつたかも知れないけれども我々はこの眞面目の火花に對して敬意を表し度い。

四、心の叫び 二二甲 西原 勇君
力は孤獨から生れる。そしてその力は他人となつた眞人を見るときにそこに生れる。惡から喜にうつるとき——そこにほんごうの力がある。自己改造もこのほんごうの力の生れないうちにもう一步といふ所で止つてしまつてゐる。

落ちつきはらつたものだ。そしてセンチメンタルなもの云ひ様をして「心の叫び」がほんのうはつつらの叫びぢやないかと見られさうであつた。

五、バイタリチの躍動

一三甲二 細川 隆元君
誤られたる自覺のために覆はれたるバイタリチを躍動せしめよ。すべての社會問題外突問題はそれによつて解決されん。眞剣に生きよ。そこにバイタリチの躍動がある。

熱と現代に對する惡罵があつた。君がこの問題に對するときは熱烈なバイタリチの躍動があつたのだらう。壇上の態度辯説は眞面目

であつた。

六、私の藝術

一三 甲 宮崎 二見 君

すべてのものばそれ自身比類がない。だから私の藝術もユニークである。藝術は生活そのものであり、肉もまた美しい藝術品である。

ユニークなる自己を育て自己を完成するに偉大なる藝術である。未成品として打ちても絶えざる向上があれば満足だ——人間は宇宙の如く絶對ぢやないから。

手廣い商賣をちんまりとまとめ得たこの方は一個のアーチストであつた。あまりひろげ

すぎて滅烈だと思つてゐた聴衆をほかんその後に残してさつぱりと清算をしてしまつた。

七、未來に生きよ 一三 甲 日高理四郎 君

未來に生きよ——と叫ぶ君は現在をもまた忘れずに論旨を進めるに少しも誤たなかつた。次

から——と辿る辯は決して不快ぢやなかつた。そしてこれもまた生々しい若い血の迸りであつた。理想郷のあるところ——そこが未來だ

未來に生きよ。さいふやうなことを云つた。

八、白道 二二 甲 村山 益敏 君

洗練せられた感受性に依つた直觀、事實の上に立つた直觀を以て、焰と氷との間の一道の白道を辿れ。人生の平衡の破れたときに吾人

のピッチは上げられなければならない。

洒々たる態度。なれた辯だ。野次も困つただらう。だが壇上に於ける君はあまり身体を散歩させずさる。

九、谷川と蛙 一三 甲 一 石井麻佐雄 君

自然に依つて生れ自然に依つて育まれたる人間は自然の中に生存しなければならぬ。文明もまた自然に沿ふて發達しなければならない。

柔いならぬかな辯だ。だがあまりに聴者に顯著しすぎる。だがその自然に沿ふる自由の獲得は力強かつた。

最後に宇佐美部長のがつちり十分間のお話はすべての人々の頭を傾かしめた。黄昏れた中を歸る聴衆の頬には血が上つてゐた。

(杉森)

思想問題講演會

思想問題講演會は多くの人々の要求を充たしたものとされて歓迎された。十一月十四日午後三時から先生に請うて講演していただいたのだつた。聴衆は瑞邦館に溢れてゐた。壇上にある先生、ベンチにある聴衆。その顔は熱と光とに輝いてゐた。

一、現代經濟生活の特徴と唯物史觀

坂田 教授

マルクスの紹介で啓發さるゝ所甚大。未來に向けるゝ若人の心は熱し高調し眼は燃に輝いた。附言に曰く生産機關の變動は必然的に社會的變動を來すが我が國の現状は未だ農業本位で其の期に達せず。

一、現代思想の批評 田中 教授

デモクラシーを批判しデモクラチック、スピリットを説き家族主義の優越を以て結論された。

一、國家主義と國際主義 小松 教授

二主義の主張を紹介し。終りに論評して中庸を得よ。

例 會

十二月五日(急)午後三時から大正八年の最終例會を開いた。試験前の故か甚だ少數時々増減があつて三十名乃至五十名位の聴衆しか集らなかつたが、直學な聴衆を相手として叫んだ辯士の寶玉の如き思想と言葉とは何物よりも尊いものであつた。

一、開會の辭 杉森 委員長

學生たる前に先づ人間たれ。試験に提げれ

す眞の人間たらんことを求めて集られた眞摯な諸君に感謝する。是れ正に當日の會衆一同の誇だつた。

一、執著 文一甲一 草場 弘君

執着は人を無力にし醜くする、あらゆる執著を脱したところに尊い美しい靈の輝きがある。久米の仙人平清盛ナボレオンの最後皆醜い執着にさらはれたものである。西行の瓢々乎として遍歴したあの執著を去つた生活は美しいものぢやないか。そしてあの境地こそ自由な自我實現への道であり自由の殿堂である。だが目的に達する執着の排斥は同意出来ぬ、論者も理想追求の熱心さへ思ふべき執着とは考へてゐまいが。元氣に充ちた辯だ。

(佐生)

一、心身無差別説の立場から

一三甲 田村 精君

人間の底に流れる眞生命の光輝を認めよ大戦の結末は聯合國の勝利に歸した。だが勝たものは聯合國のみだらうか人間の心を脱し身を超へたる奥底にみてのざる眞理の勝利ぢやないだらうか。

前年の二元論唯物論等の論駁は離解に傾

いた、短時間には稍無理だつたと見る。

(佐生)

一、所感 三二 竹井彌七郎君

内容は自己及び社會についての所感で、自己は自由意志を有する神の所産だと思ふと説き、社會に對しては物質主義な流行の缺陷、感情教育の不足等を論じどこまでも眞摯なところが悦ばしい。

一、行き當るまで 一二兩 萬仲余所治君
凶暴な物質力に壓せられてゐる本當の人間性味。吾人の欲するところはその壓せられてゐるそのものでありその接觸である。今それが展開し様としてゐる。この戦に馳せ參ぜよりの進まり。遮るものがあるならばわれはそれを押し破つて進ふ。

眞の叫びの燃焼するところには何物にても買ひ得ない熱がある。夾かなる辯さすべてを焼きつゝさうとする、その熱さは相俟つて立派な演説たらしめた。(身軀が多少動き過ぎた様に思ふ佐生)

一、徹底 一三甲 宮崎 見二君

眞理は混沌より生ぜずして誤謬の中より生ずる(ヘーコン)誤謬を誤謬として徹底

底せしめよ。そこに眞理がある。迷ひの十字路に立つて右を見左を眺めてゐては遂に眞理には達せないのであらう。利己を捨て、徹底を見る。徹底したときに眞理を見る。

(熱帯不足)

一、叛逆の背後に 一三甲 下村 信貞君
生命のための叛逆思想の宣傳古の偉人の叛逆の背後には生命自己眞理の燃わてゐたのだ。それがあつたればこそあらゆる傳統を破りすべての因襲を押しつけて直接眞理に觸れたのだ。その前には眞理への怖れは除かれてゐたのだと思ふ。わが龍南に於て眞に生命に燃ゆる者が幾人あるか。自由の沃野にまた廣大なる草原にも出る樹木であり滔々として流れるアマゾンである生命を尊重するが故に大なる叛逆を企てる。

(滔々辯じ去り辯じ來ること半時間餘。眞摯な熱情に充ちた大演説であつた)

一、閉會の辭 田村 委員

斯て午後五時十五分閉會。一鉢に思想の豊富だつたこと、辯の眞剣さとは例に無い位で悦しかつた。(杉森、佐々木)

弓術部報

十一月一日 長崎高商から四人仕合に來た午後二時から本校道場で競射を行ふ。尺二的
一人二十射

高商 江藤 井上 北島 野村 中矢卅八本
五高 柏木 若島 武田 古川 中矢卅七本
十一月十六日 熊本學生競射大會は午後一時から商工射場で舉行せらる。本校參加者、八名古川君島、准藤、林田、武田、千野、山下、柏木此日醫專十五名、高工十三名、藥專十一名で本校出席者例になく最も少數。六射的競射。中矢一本の差で優勝旗を醫專に奪はる。中矢醫專二十本五高十九本。

十一月二十二日 豫れて高工を招待しておりましたが今日午後四人練習に來た。本校生二人を貸して六人づゝ紅白に分れ、一人二十射の龍射を行ふ。概して中りが出なかつた。此日寒く、火鉢二個を出す。

十一月二十三日 本山、藤崎兩組の弓の仕合が午後一時から本山宇野師範の道場で行はる。坂本師範の依頼により藤崎組の加勢に行く。右川、君島、千野、柏木、高工からも四人加勢あり。學生の加勢で藤崎組勝つ。優勝旗あり。

り。的は六寸。

山岳會報

△旅行や登山が遊戲視せられたのは既に過去の事となり、今日では剛毅たる氣質強健なる體力、活用し得る智識を得るの重要な機關として尊重せらるるに至つた。吾が龍南に於ても其の必要を認め、大正五年有志の發起にて山岳會が設けられた。爾後委員諸君の獻身的努力により年々隆盛に赴き、今年の如きは會員の數百五十名の多きに上つた。實に龍南の一角に侮る可からざる勢力となつて現はれて來た。それと共に吾人の責務は益々大となり、その眞の目的を實現せんには、どうしても現版の儘では満足出來ぬ、堅實なる組織とせねばならない。ここに於て、吾等は十一月三十日に龍南會委員會に山岳會をその一部にせんとの案を提出した幸にも委員諸君の賛成により、ここに「山岳部」なるものが生れたのである。吾人は益々努力して、完全なる組織の下に、内容を充實せしめ、以て先輩諸兄の殘した貴き歴史を永遠に傳へんことを期するのである。

△三ノ岳登山——十二月三十一日細雨を冒し

て三ノ岳に登る。白雲運行の景殊に宜し、小天に上る。野尻氏の好意により其の蜜柑畑にて自由に採ることを許さる。夕暮頃木葉より汽車にて歸る。會するもの八名。(鈴木)

第一回龍南短歌會

數年前工藤君等の極光社の活動が中絶して以來特に不振を極むる感があつた寥々たる龍南短歌界に、再び短歌の會を起し相寄り相集うて研鑽したい要望は、次第に同志の間に溫醸し醗酵して、遂に去る十一月廿九日(土)午後七時より公會堂第七號室に第一回龍南短歌會を開くこととなつた。集る者高木秋田二教授を始として廿八名。持寄詠草三首以内總數六十九首を臚寫に附して配布した。先づ佐々木君の開會の挨拶に次で、高木教授短歌會に對する希望を述べられ競技的精神並に會に伴ひ易い型を排し敬虔な態度を以て互に批評し合ひ高踏的に墮せない様注意す可きことなど説かれる。夫れから自己紹介の後、愈批評に意見を吐露し、華かな電燈の下時ならぬ議論の花を咲かせ若人の心は只もう挽びに躍つた。最後に會に就て協議し、毎月(但試験月

を除く)會を開く事とし、世話係を司會者の
指命で三三高林傳男、一二乙磯山秀、理甲二
長光純三君に委託して、十時半一同豫想外な
盛會に名残を惜みつ、散會した。

寫眞俱樂部

仰げば蘇峰日夜力強き煙を吐き、俯せば白川
四時妙なる樂の音を奏して流れてゐる。西の
空に聳け立つ金峯の山は紅葉の綾を織り、南
の方清き水を湛へたる江津の湖は靜かに夕陽
をうけてゐる。あゝ私達の環境は、それ自身

一つの美しい繪であり一つの美しい詩であり
得る。この美しい自然の中に育まれてゐる私
達は一方ではもつと自然をよく了解し自然に
親み又他方では高尚なる寫眞趣味を涵養する
ために茲に寫眞俱樂部なるものを組織し隨時
伴ひて美しき自然の景を方寸のカメラに収め
てゐる。而して部員の作を集めて時々展覽會
を開き或はその交換をして益々高尚なる趣味
の普及と美的情操の養成に力めてゐる。暑
い眞夏の日も寒い嚴冬の夜もその暑さ寒さを
忘れて暗室の中で現像に従事し徐々々現はれ
て来る像を見るのは愉快だ。尙物理圖書兩教
室の暗室を貸して貰へる事になつてゐる。現

在部員數は三十有余名ある。同好の士よ、奮
つて参加せられんことを勧める。便宜の
ために左に現在幹事の名を記しておこう。

(互生)

二・三・甲 石田一 岡野新 城戸良之輔

附記——十月廿四日寫眞展覽會を圖書教室

で開催。出品數百數葉。

乘馬會

入會希望者多數に付抽籤を以て文科理科各
四十名を選出して本年度乘馬會を組織し、十
一月廿九日(土)午後一時より輜重隊練兵場
に於て其の初乗をなし、練習を開始した。尙會
の事に付て不明の點あらば二三甲一竹村茂孝
君、二三甲二武藤文輔君に尋ねられたし。

花陵會

十月七日(火) 例會を兼ね創立者の一人
小池愼藏氏並に齊藤基督教青年會同盟主事歡
迎會を開く。

同月廿日(木) 瑞邦館に於て宮川經輝氏「
現代と我」の講演あり。

同月卅一日(金) 午後一時會館創立記念祭
舉行式後例によつて盛なる餘興あり。來會者

二百餘名。

十一月十七日(月) 會館で例會を開き續い
て市内專門學校基督教青年會親睦會を催す。

同月十九日(水) 夜發火演習一泊地山鹿に

於て堀明教會に傳道演說會を催す。辯士小林
末夫・佐々木高遠・立山潮彦・米村義雄諸君。

臥龍會(獨法二年)演說會

十二月三日瑞邦館に於て開會、

- 一、開會の辭 阿部公政君
- 一、臥龍の本領 佐藤 彌君
- 一、工場の中にて思へる 辻 恒彦君
- 一、龍南生活の特權 山口 喬君
- 一、要する者は義人の血なり 萬仲余所治君
- 一、自己の爲に 米田富士雄君
- 一、閉會の辭 足立知信君

雜

青柳會十月廿四日集會所で新入生歡迎を兼ね
演奏會を催す。

相撲俱樂部十一月藥專相撲大會出場

庭球部十二月七日九州日々主催庭球大會出
場。

寮 報

阿蘇登山の記

十月十八日

午後一時四九分——立田口驛發。三時一〇分

——立野着。四時——栃木小山旅館着。

一行百五十名。習學寮旗を持つて行く。旗手

寫眞屋十四五名の連中は、客車に隙間がない

ので貨車に乗り込む。煤煙の攻撃には閉口し

た。停車中箱の内から爆發する放歌の聲も流

石に進行中には、無蓋車には聞けない。立野

で降りた時は、ガランとした列車の姿が妙に

可哀さうに見えた。

火山灰の道には閉口し乍ら戸下温泉附近の風

光を賞美することを怠らなかつた。

温泉壺に浮びながら歌を誦した時は、喜が多

すぎてそれを肉體的に放散したかつた。自然

騒動が生ずる譯である。晩は何時頃まで騒い

だかよく判らぬ。

十月十九日

午前七時——宿舍發足。十時——頂上着。

午後六時——歸寮。
余り隊伍を組むことを心にしない連中だから

不明な道には紙片を撒いてあつた。

「樹間がくれば見居れば阿蘇の青煙がすかにき

ぬぬ秋の遠空」といふけれども何處から見れ

ば青煙が知らぬ。清らかなる古の火の燃ゆるこ

と戀かさまがふ阿蘇の山かな」この歌人も最

近噴火以前に夫君同伴で登つた人だから、多

分當推量で白いホクちやわかるまい水蒸氣を

みて詠んだのだらう。其願ふことでは物足らぬ。

自分の家に火がついて黒煙がウツ巻いてゐる

さでも云はねばなるまい。地鳴をしながら天の

一方を推し上げるやうな勢で黒い奴が上つて

行く。

實際一種の宗教的な感を抱かざるやうだ。

でも這麼ものに對して懷んでみてゐる様な連

中ぢやない。反抗してやり度くなるのだ。あ

の噴煙を背景にして火口の灰を舞臺として地

鳴を囃子と曲用して武原頭の合唱のものとダ

ンスを二回までやつた連中もある而も原始的

に裸體になつてやつた人などは、山の上での

記念撮影よりより好個の思出になるだらう。

宮地に降りて、講演にお出た田中教授と共に

凱歌を奏して熊本に歸つて來た。見返れば阿

蘇山は薄暮の中により雄大に見えて煙を吐い

てゐた。——十一月廿日、小川柳平記

全寮茶話會

多大の期待と豫想とを以て夢想されてゐた全

寮茶話會なるものが十一月一日午後に於て現

實となつてあらはれた。午後一時はがらかに

長く喇叭の音が寮内に響き渡るユニホーム

に身を固めた人々がざやざやと武夫原に詰め

かけた。これから運動會が始まるのだ。先づ庭

球野球そしてランニングそして相撲と順を追

ふて行はれた。

庭球は一二寮軍、野球は三四寮軍の勝利とな

つた。ランニングは各寮選出の選手互に鎬を

削つたが終に一寮軍の勝利に歸し紫紺の名譽

ある優勝旗はその手に落ちた。敗殘の將の心

中や如何。

相撲はこの日の呼物として多數の力士に加ふ

さに幾多の飛入があつて極めて盛大に行はれ

た。

赤銅色の皮膚、古のスパルタクスの思ひ出さし

む様な骨格を見ては共鳴せざるを得ない。

筆者は國技館裡の龍鷹虎搏が偲ばれてならな

かつた。實にその男性的で勇壯なところは國

技たるに背がない

數多の剛の者を投げ飛ばして五人抜三人抜の

の榮を得た猛者の得意は想像する程愚かであらう。

午後六時運動會を終つて大晚餐會にうつる。

幽室の潜蛟を舞はしむる底の美しい音樂の音に思はず思を合せながら美しい漫書に裝飾された廊下を通つて食堂に入れば山海の珍味が山と積まれてゐる。堂の隅々にアインスツツアイドライ萬歳一の聲が頻りに聞える。美食に飽いたので大聲でもあげて腹を減そうとするのだらう。

七時から集會所に於て餘興會が開かれる。

習學座主と自稱する○君の開會の辭について武夫原頭の合唱があつたのを皮切りとし琵琶講談二〇加をはちめとして種々の面白く可笑しい藝が演ぜられた。その他寮生諸君の隱藝が出て極めて盛會だった。かくて十一時散會したがなほあきたらず五高ダンスをダンスしてゐる面々も少くなかつた。寮生はこの一日に全く命の洗濯をした心地で安らかな眠に就いた。終りにこの日の舉に御盡力あつた方々の御好意に對し深い感謝の念を捧げるものである。鐵堂記

習學寮第二回演說會

十一月三日午後三時於瑞邦館

委員の勸誘が興つて方あつたのか、それともあの皮肉めいた樂つたい様な募集廣告が力を奏じたのか、兎も角も今度は一年の人々の中から比較的澤山の出演者のあつたことは、演說會そのものも趣旨から云つても、種々奔走した委員に取つても大變に喜ばしいことである。

元來私達が寮生の旁で演說會を開くのは、何も名論卓説を聞き度い又吐き度いと云ふ様な意味からでは無くて、私達が自分の心の中で思つたり考へたりしてゐることを出来るだけハツキリと、出来るだけ澄みなくスラ／＼と思ふ存分に言ひ表はし得る様になり度いと云ふのが先づ何をおいても第一の目的であるのである。この意味からして私達が一人の非凡なる辯士を有することよりも、澤山の出演者を有することをもむしろ以上に誇りたのである。

今日の演說是名論も先づ無かつた。卓説と云ふ程に私達をして感心せしめたものも見付けられなかつた。けれども如上の意味に於て、

私達は慥かに或程度まで成功したと云ひ得るのである。

だから私は個々の演說に付いて一々批評がましいことは云はない方が宜いと思ふ。何故ならば私達は眞直にブン／＼伸びて行かうと云ふ道程にホンの一歩だけ足を踏み入れた人達に向つて種々なツマウナイ批評を與へて、そのためにカジカンダ型にはまつた様な所謂演說のための演說家が澤山に出来ることを何よりも恐ろしいことと思ふからである。

たゞ一言今度の演說會を全く詰りぬ極めて貧弱な演說會だと罵倒し加之投書までした寮生があつたのに對して答辯を兼ねて云つて置かう。

私達は「自己に眞實でなければならぬ」と常に思つてゐる。けれども自己に眞實であるべく私達のなすべきことは徒に客觀的考察のみによつて得らるゝものではない。寧ろ自己の中に強く感じたるものに忠實であることが最も自己に眞實なことである。自己の中に最も強き力を有するものに勇敢に而も忠實に仕へることを云ふことを離れて、自己の眞實生を造らうとしても、それは畢竟虚偽である。私達は何よりも先づ自己を感じなければならぬ。自

已の中に最も力強きものを感ぜしむ。

そしてそれを大膽に表現し遵奉し、事に

あらゆる努力を集めねばならぬ。かくの如き

見地から見れば如何に云つてゐるかが貧

弱さうに見えてもそれを一概に罵倒し去るの

は考へ物だと思ふ。これだけ書いて投書者の

反省を促して置く。

最後に當日の出演者の氏名と演題を録して

筆を置く。

一、人生と四季

二、偶感

三、不平

四、未定

五、自己を觀たる自己文、甲、草場 弘

六、理想郷

七、行けるまで 一、甲、二馬場岩已知

八、未定 三、二、竹井彌七郎

九、塵の中より 三、二、丙萬仲余所治

以上

消防練習

十一月二十三日午前一時頃けたまふし非常
喇叭と鈴の亂撃とに圓かな夢を破られた寮生
は何事ならんと窓押し開いて見れば遙か白草

原の方に天に冲する黒煙と共に猛火の荒れ狂
ぶてゐるのが見ゆる。

化學教室の火事だといふ。着更へもそこそ

飛び出して見れば白草原に藁の焚火をしてゐ

る。

一同啞然として聲なし。消防隊の奮闘空から

す約三十分の後無事鎮火した。盛に憤慨する

者も居る。

「飛び出せば白草原の焚火哉」と洒落る者

もある。

思ひ掛けなくも運れた薩摩芋に怒を抑へなが

ら寮に歸る。鐵堂記

雜報

第二十九回記念式

十月十日午前十時開式。校長の式辭に次で
職員總代堀教授生徒總代立花總務の各祝詞來
賓川口熊本縣知事の祝詞(代讀)朗讀あり次に
生徒記念の歌合唱詩歌文章朗讀(長詩一篇)終
つて擊劍及柔道の仕合ありて十一時十分閉式

高工運動會本校選手派遣

十一月一日(土) 高工運動會に選手を派遣

せしが五高及専門校の八百八十碼競走に於て
本校弘田君一着(二分廿五、四分の三)藥專坂
田君二着本校君島員一君三着。

發火演習

十一月十九日(水) 雨は止んだが曇天。午
前七時校庭集合、上熊本驛發八時廿五分の汽
車で植木迄行き山鹿に向つて進發、前後の雨
で道惡く行軍を稍辛し。中分田村で晝食した。
第一日の演習は北軍防禦南軍攻撃に當り中
分田、宮原間の二平地で行はれ冷い細雨の降
りしきる中で奮戦午後一時より同廿五分に至
る。講評後山鹿に三時着、對當の各旅館に入
り同夜一泊。

同月廿日(木) 快晴絶好の演習日和だ。午
前七時山鹿出發、江田村に晝食後、南軍高瀬
方面に退却し北軍追撃して零時半より退却軍
後衛と追撃軍尖兵の間に戰端開かれ、菊池川
左岸小田村の原野で兩軍の大後衛戰となり一
時廿分休戰、菊池川原で講評があり、高瀬四
時の汽車にて午後五時通歸校。(詳報は都合に
依り次號に譲る)

龍南會役員會

十一月廿八日(金) 午後三時より瑞那館に

於て龍南會役員會議開催。次の諸件を議す。

一、龍南會規則改正案(山岳部、新設、並に會費増額等)

二、追加豫算案。

三、龍南會役員選舉規則施行細則改正案

一、各部選手を京都に派遣の件。

大正八年度追加豫算案

收入部

四二五〇〇 通常會員會費増徴總計額

支出部 (豫算額ニ依リ按分比例ニテ分配)

選手遠征補助費

四七、五九

無所屬

一〇二、三六

演說部

一一、二六

雜誌部

一〇二、五〇

劍道部

二八、五九

柔道部

二二、八二

弓術部

一八、一六

野球部

二二、二五

庭球部

三三、二五

端艇部

五一、一七

豫備金

四、〇五

合計

四三五、〇〇

職員消息

吉岡校長 九犬へ打合せの事あり十月十四日

出張十五日歸校。十一月廿八日出京

脇谷教授 學術研究の爲天驕郡牛深へ出張(十月廿四日)

教授本田弘氏 依願免本官(十月三十日)

宇土虎雄氏 柔道教員囑託(十一月四日)

高木教授 國語科主任並ニ龍南會雜誌部々長

囑託(十月廿九日)

杉山教授 令息十一月八日逝去せらる。行年十七歳、謹しんで哀悼の意を表す。

秋田教授 母堂十二月十日郷里鳥取に於て逝去せらる。謹しんで哀悼の意を表す。

山形教授 過去二箇年間英米留學中なりし同氏は十二月十七日無事横濱に安着されたり

寄贈雜誌

修猷館同窓會誌四七・千葉醫專一一五並一

一六●神戸高商學友會報記念號並一三五●

大阪高工工業俱樂部六●明治専門責善會誌一

二●地上の子第一卷第二號●連作第四號

前號訂正

○龍南百七十二號(百七十一は誤)

目次中○一三甲二島崎得道○一三甲二下村信

頁(FROSTHAMLET)○一三三●東博二○三

三●高林傳男○一三三●花田鐵太郎○一三三●佐々

木高遠○一三三●二郭邦民○一三三●淺野正一

○理甲 長光純○一三三●楠見榮市○一三三●須

田一三三(虛夢生)○一三三●岡林平

頁段行

61 2 眼も唇も石のやうに(右)(一)印誤

14 暗く濕つてゐた(溫)

65 1 民國六年秋開復辟及蒙古之亂

66 楠見榮市

67 ちりり／＼西瓜畑の後にもゆ火のよろ

しさよ山風吹けば

68 櫻一枝釋迦に戯るゝ花見客

68 場末の賣藥屋の夕顔の花大きく

78 2 末る。(佐)

81 1 1 黃得中

82 2 2 高森眞二

82 1 1 神江恒雄氏(都)

83 10 10 辯に筆に大に活動され(單)

編輯室より

□本號の發行の可能に就ては經濟上危ぶんでゐた所だが幸に追加豫算へ薄い乍らも豫定通り懸賞文發表號を出す事が出来たのは悦び